1. Project Title

S: こんにちは皆さん。私はシャノン・リワグと申します。

T: 私はタイラス・トレスです。

W: 私はウィル・ウルフキエルです。

S: 私達のキャップストーンのタイトルは「日本とアメリカのマリファナ使用者に対する認識の比較」です。

2. Outline

T: これが概要です。

3. Significance of Study

S: 次に研究の重要性です。
なぜ私達がこの研究をすることにしたかと言うと、自分自身のこれまでの経験や日本に留学した経験から、日本人はマリファナや麻薬に対して、アメリカ人より強い嫌悪感（けんおかん）をもっていることに気づき、その事に興味を持ったからです。

T: カリフォルニアではマリファナに対し、2016年に合法化される以前から寛容な風潮がありました。しかし、日本では現在マリファナは違法であり、社会的に非常に強い嫌悪感がもたれていることは、私達にとって驚きでした。

W: そこでこのような認識(にんしき)の違(ちが)いはなぜ、どのように生(う)まれたのか研究(けんきゅう)を したいと考(かんが)えました。また、こういった認識(にんしき)が日本(にほん)と アメリカ の社会(しゃかい)にそれぞれどのような影響(えいきょう)を あたえているかも、調(しら)
べてみたいと思(おも)いました。

4. These are our research questions. ___,____, and ____

S: これが私達の研究質問です。

一、日本とアメリカにおけるマリファナに対する一般認識とはどのようなのか。

二、マリファナ使用者に対する認識に学校教育と家庭教育はどう影響しているか

三、マリファナに関して一般認識はマリファナ使用者に対して社会的にどのような影響をおよぼしているか。

の以上（いじょう）です。

5. This is our literature review outline

T: これが研究背景の概要です

6. Keywords 1

T: まずは、研究のキーワードについてご紹介します。重要なキーワードとして、大麻、マリファナ、麻繊維、脱法ハーブなどがあげられます。

7.America Pre War on drugs 1/3

麻薬戦争前のアメリカの、米国の麻薬史（まやくし）として、まず1611(ろっぴゃく)年に麻栽培(あささいばい)がすでに始まっていました。

医学的（いがくてき）な研究（けんきゅう）は1860年ごろ（はっぴゃく）から始まり、また1889（はっぴゃく）年にアヘン中毒（ちゅうどく）や慢性的（まんせいてき）な中毒（ちゅうどく）を治す（なおす）為（ため）大麻を使うことがありました。

そして、徐々に（じょじょに）大麻はマリファナの麻薬（まやく）により関連（かんれん）付け（づけ）られていきました。(could consider skipping this part)

1936年にマリファナに対する否定的(ひていてき)な見方(みかた)をした「リーファー・マッドネス」という映画により、米国の社会（しゃかい）はマリファナに対する意見が代(か)わり、1937年にマリファナ税法（ぜいほう）が可決（かけつ）されました。(could consider skipping this part)

8. America Pre War on drugs ⅔

1900年代初頭（ねんだいしょとう）にマリファナの利用者 (りようしゃ）は一般的(いっぱんてき)ではありませんでしたが、マリファナはメキシコ人の出稼（でかせ）ぎ労働者（ろうどしゃ）や黒人（こくじん）のジャズミュージシャンのコミュニティで人気になったと言われていました。(could consider skipping, this part is covered by bullet 3)

しかし、これは、米国のマリファナに対しての認識（にんしき）がメキシコ系(けい)の人々(ひとびと)や黒人の人たちへの偏見（へんけん）に影響(えいきょう)したと考えられます。

1916年にランドルフ・ハーストはマリファナや麻繊維(あさせんい)に対して行ったキャンペーンの中で「マリファナを吸(す)っているメキシコ人やアフリカ系(けい)アメリカ人が白人（はくじん）は失礼（しつれい）で、女性(じょせい)をレイプしたりする」や「ジャズはマリファナがもたらした悪魔（あくま）のブードゥー」などという人種（じんしゅ）差別（さべつ）の発言（はつげん）をしました。

ACLUによると、白人のマリファナの利用者(りようしゃ)が少ないという証拠（しょうこ）がないにも関（かか）わらず、アメリカの黒人のマリファナの所持（しょじ）の逮捕数（たいほすう）は白人と比(くら)べると３．７倍(ばい)と高く、ニューヨーク州(しゅう)のラテン系(けい)アメリカ人の逮捕数（たいほすう）は４倍(ばい)と非常(ひじょう)に高くなっていることがわかります。

9. America Pre War on drugs 3/3

1960年代(ねんだい)から70年代の初頭（しょとう）までマリファナはヒッピーやボヘミアンの文化と関(かか)わり、マリファナの使用率（しようりつ）が増（ふ）え社会(しゃかい)の意見(いけん)が変(か)わってきました。そして、1977年にカーター大統領（だいとうりょう）の政権（せいけん）は公（おおやけ）に３０g以下（いか）までのマリファナの合法化（ごうほうか）を唱えました（となえました）。
(Can skip carter stuff)

10. America After War on drugs ⅕

ニクソン政権は1971年に「麻薬戦争」という言葉を最初に使いましたが、カーター政権が終わり、1981年にレーガン政権が発足した後は事実上の麻薬戦争が始まりました。

11. America Post War on Drugs 2/5
大統領夫人のナンシー・レーガンは1984年に若者に対する反麻薬キャンペーンの演説で「ただノーと言おう」という有名なスローガンを最初に作りました。

このキャンペーンから、少量のマリファナの合法化に賛成した米国人は1980年の53%から1986年の27%までに落ち、マリファナに対する罰則強化に賛成の住民も43%から67%に上がり、高校生など若者の意見が変わったことに関係があります。

12. America Post War on Drugs ⅗

レーガンの麻薬犯罪者に対する罰則が増加し、1986年には必要な最低服役期間のきていが導入されました。
このため、非暴力の薬物使用逮捕の割合は、1980年の5万人から1997年までに４０万人を超えるまでに増加しました。

13. America Post War on Drugs 4/5

1989年にブッシュ大統領の計画4点でラテンアメリカでの作戦のための10億ドル以上の予算と米軍を利用するという意図をおおやけに述べました。
米国の反麻薬の作戦はコロンビア、メキシコ、ホンジュラス、パナマ、などのラテンアメリカの国々に広まりました。
14. America Post War on Drugs 5/5

現在マリファナは33の州で薬として使用され、そして10の州で娯楽的に合法です。
ピュー研究所のアンケートによると62%の米国人はマリファナの合法化に賛成しています。

さらに、Gallup研究所によるとマリファナを経験した事がある米国人は1969年の4%から2013年の44%に上がりました。
しかし、2017年による薬物使用逮捕数は1,632,921人にものぼり、同時に米国の収監率は世界で最も高くなりました。

15. Japan Pre Reconstruction Period ½

T: 次に、第二次世界大戦前の大麻の歴史について発表したいと思います。
日本では縄文時代に大麻は大切な繊維でした。
麻繊維は麻の茎から作られる、靴、 道具、宗教上の衣裳などの日用品に使われていました。
過去の大麻のイメージは危険な麻薬ではありませんでしたが、第二次世界大戦後に大麻のイメージが変わってきました。

16. Japan Pre Reconstruction Period 2/2

T: 日本の19世紀末での広告は紙巻のインド大麻が様々な病状を治すことができると報告されました。
最初の国際アヘン会議で大麻は「危険な麻薬」となり、あへんと他の麻薬と共に禁止になりました。
1940年に、統制会社が設立され、戦争のためのすべての物質を担当することになりました。
二年後に、統制会社の管轄（かんかつ）として23の麻繊維の会社が存在しました。

17. Japan Post Reconstruction Period ⅓

第二次世界大戦後に新政府体制になってから米国は日本の麻薬に関する法律に大きく影響しました。
1948年には、麻繊維の輸出入や販売に対してだけではなく大麻取締法という法律が制定されました。

第二次世界大戦で麻繊維は綱、落下傘の縄などを使ったため戦争の物質と見なされ、大麻取締法は米国が日本の軍事的な勢力を可能な限り制限していると見なすことができます。

18. Japan Post Reconstruction Period 2/3

1963年に日本は麻薬取締の資金を増大した後、麻薬の逮捕数は記録的に最も高くなりました。日本の麻薬の取り締まりはメタンフェタミンとシンナーに集中しましたが、シンナーの逮捕は1980年代にピークに達した後、徐々に下がり、2006年にマリファナの逮捕はシンナーより多くなりました。

19. Japan Post Reconstruction Period 3/3

世界保健機関 のアンケートによると日本人の1.5%がマリファナの合法化に賛成します。
脱法ハーブという合成カンナビノイドに対する日本人の一般認識は脱法ハーブは自然から生まれたマリファナの別の形と考えています。
しかし、脱法ハーブが異なる副作用を持つので、マリファナに比べてより危険です。

20. American Education ½

1983年にロスアンゼルスで青少年（せいしょうねん）の薬物乱用（やくぶつらんよう）に対応（たいおう）して薬物乱用防止教育（やくぶつらんようぼうしきょういく）D.A.R.Eというプログラムが始まりました。(D.A.R.E, 2019)
米国の学校で麻薬教育に関するクラスが少なかったため、D.A.R.Eは早くに全国（ぜんこく）のプログラムとして広(ひろ)がりました。 このプログラムは「悪影響（あくえいきょう）がある麻薬について特定（とくてい）の情報（じょうほう）を教（おし）えることを強調（きょうちょう）しました。D.A.R.Eの 設立後ファーストレーディナンシー・レーガンの「ただノーと言おう」の偶発的（ぐうはつてき）な発言（はつげん）は全国で麻薬の教育（きょういく）を支（ささ）えるキャンペーンとして親と学生組織に広められました。

21. American Education 2/2

1986年に、ナンシー・レーガンは「麻薬の無いアメリカの組織 」と言う反麻薬運動（はんまやくうんどう）を樹立（じゅりつ）しました。マリファナは「ゲートウェイドラッグ」と呼ばれ、マリファナは中毒性が高いなどと教えました。しかし、これらの主張（しゅちょう）は医学研究（いがくけんきゅう）によって支持（しじ）ではありませんでした 。他の調査（ちょう

さ）によると、D.A.R.E.や「ただノーと言おう」のキャンペーンは、若者（わかもの）が麻薬（まやく）を試（ため）したい気分(きぶん)にならなかったという証拠（しょうこ）がありません。

22. Japanese Education ½

T: 戦前の大麻の教育は、教科書には栽培や収穫の方法について焦点を当てていました。
日本の麻薬の教育はアメリカに影響を受け、麻薬に反対する意見を広めました。
60年代に、乱用者が増加したため、コミュニティの組織はいくつもプログラムを樹立を始めました。
同じ組織は薬物乱用者に対する治療と社会復帰の支援を改善するために地域社会や市役所と協力しました。

23. Japanese Education 2/2

T: 1987年で、警察と他の反麻薬組織は反麻薬教育の教材を作ることを始めました。
一年間後で 国連薬物乱用根絶宣言には、アメリカの「ただノーと言おう」の運動と同等の日本の「ダメ。ゼッタイ。」のスローガンを作りました。
その時から現在に薬物乱用対策のために「覚せい剤乱用防止センター」と「厚生労働省」は日本中の学校と地域社会に反麻薬の情報を広めました。

24. Research Method

T: 次は研究方法です。
60名のアメリカ人と60名の日本人がこのアンケート調査に参加してくれました。
そして、その内訳として４つのグループに分けられました。
マリファナを使用した事があるアメリカ人と日本人が30名ずつ、
マリファナを経験した事がないアメリカ人と日本人が30名ずつでした。
アンケート調査は、グーグルフォームを使って行いました。

25. Survey Results Part 1

次に研究結果（けんきゅうけっか）についてお話し（おはなし）したいと思います。研究質問（しつもん）１は、「日本とアメリカにおけるマリファナに対する一般認識（いっぱんにんしき）とはどのようなものか」でした。

26. Marijuana user image

まず、社会（しゃかい）のマリファナ使用者（しようしゃ）に対するイメージとは何かと聞いたところ、日本の回答者（かいとうしゃ）の最も（もっとも）多かった答え（こたえ）は「危険」（きけん）で、アメリカの回答者（かいとうしゃ）は「自由主義者」（じゆうしゅぎしゃ）と答(こたえ)えました。

27. Sleep analysis

次に、睡眠（すいみん）の質（しつ）に関（かん）する意見（いけん）について聞いたところ、アメリカの回答者（かいとうしゃ）と日本の使用者（しようしゃ）はマリファナは睡眠（すいみん）の質（しつ）を向上（こうじょう）させると思っていますが、マリファナを経験（けいけん）した事(こと)がない日本人は睡眠（すいみん）の質（しつ）を向上（こうじょう）させると思っていないという事がわかりました。

28. Addiction

そして、中毒性（ちゅうどくせい）に関する意見についてですが、アメリカ人と日本人のマリファナの使用者（しようしゃ）は、マリファナは中毒性（ちゅうどくせい）が低い（ひくい）という答えが多かったですが、日本人でマリファナを経験（けいけん）した事がない回答者（かいとうしゃ）は中毒性（ちゅうどくせい）が高いと考えているようです。

29. Part 1 Summary of Findings

ここで、研究質問（けんきゅうしつもん）１の結果（けっか）のまとめです。

日本のマリファナを経験（けいけん）した事がある回答者（かいとうしゃ）も無い（ない）回答者（かいとうしゃ）も、社会（しゃかい）のマリファナ使用者（しようしゃ）に対するイメージは危険（きけん）だという事がわかりました。この理由（りゆう）で考えられることは日本のマリファナのイメージは大麻とマリファナだけではなく、脱法（だっぽう）ハーブも含（ふく）まれているからかもしれません。

60年代（だい）のアメリカの対抗文化運動（たいこうぶんかうんどう）に影響（えいきょう）を受（う）けて、アメリカではマリファナ使用者（しようしゃ）に対するイメージは自由主義

的（じゆうしゅぎてき）になりましたが、日本ではまだそのような運動（うんどう）もなく、マリファナの使用に対する考え方（かんがえかた）が保守的（ほしゅてき）だと言えるでしょう。

アメリカの回答者（かいとうしゃ）と日本の使用者（しようしゃ）はマリファナが中毒性（ちゅうどくせい）が低い（ひくい）と答えたましたが、日本のマリファナを経験（けいけん）した事がない人は中毒性（ちゅうどくせい）が高いと答えました。

30. Part 2

T: それでは、研究質問二の結果を述べます。研究質問２は「マリファナ使用者に対する認識に学校教育や家庭教育はどう影響しているか」でした。

31. When did you learn about marijuana

T: 最初に「マリファナについて知ったのは何歳の時」の質問に対して、

18歳以下でマリファナについて知った日本人でマリファナを経験した事がない回答者は93%であり、40%の日本の使用者は18歳以上でマリファナについて知ったと答えました。

32. What did you learn about in school

T: 次に、「学校でマリファナの何について学習した」の質問に対して、
全てのグループが学校でマリファナについて学習したことは「マリファナの使用の危険性」や「健康への悪影響」と主でした。

33. How reliable is education on marijuana from school

T: そして、「マリファナの学校で受けた教育はどれほど信頼できる」の質問に対して、
アメリカの回答者と日本の使用者の大多数は学校教育は信頼できないと思っています。
日本人でマリファナを経験した事がない回答者は信頼できると答えました。

34. Where did you receive most of your education

T: 次に、マリファナに関する知識を主にどこで学んだか、と言う質問に対して、
アメリカの回答者と日本の使用者はインターネットや友達から学んだと
答えました。

しかし、日本の経験した事がない人は主にニュースやメディアや学校で学んで
いました。

35. Part 2 Summary of Findings

T: 質問二結果を総括するに日本の使用者はマリファナを経験した事がない人より古い時に
マリファナについて知ったと答えました。
この事から、日本の学校教育で、より早く麻薬について学ぶと日本人は麻薬を使う
可能性が低くなると言えるかもしれないです。
そして、日本人でマリファナを経験した事がないグループは、主に学校、ニュースや
メディアからマリファナについて学んだと答えました。
一方で、アメリカの回答者と日本の使用者はマリファナに対する知識はインターネット
や家族から学んだと答えました。
日本のマリファナを経験した事がない人はマリファナに対して最も違う意見を
持っていた事で、日本では教育と認識がつながっている事を示しています。

それでは、研究質問３の結果について発表します。研究質問３は、「マリファナに関して一般認識はマリファナ使用者に対して社会的にどのような影響を及ぼしているか。」でした。

37. Who knows you use marijuana

まず、アメリカの使用者は日本の使用者に比べると、マリファナを使ったことがあると知っている周りの人が多いと言う事が分かりました。

38 What would non user do if friend was using marijuana

次に、友達がマリファナを使ったら、と言う質問に対して、83%のアメリカ人でマリファナを吸った事がない人は「何も言わないで、今までと同じく普通に付き合う」と答えましたが、76%の日本のマリファナを経験した事がないがない人は「何も言わないが、たぶん少しずつ離れていくと思う」か「やめてと頼む」と答えました。

39. If you were to use marijuana who would disapprove
次に、もしあなたがマリファナを使ったら、周囲のどんな人がそれに反対すると思うか、と言う質問に対して、もし使った事がない人がマリファナを使ったら、日本人は反対する周囲の人がアメリカ人より多いと思っている事が分かりました。

40. What negative impacts have users faced

そして、マリファナが原因で経験をしたことがあるか、と言う質問に対して、ほとんどの日米のマリファナの使用者は、マリファナが原因で否定的な経験をした事がないと答えましたが、アメリカ人は「学業や仕事の質が落ちた」や「家族・友達・恋人を失った」、「仕事を貰えなかった」などの様々の否定的な経験をした事があると答えました。

41. Reason to use marijuana
次に、アメリカの使用者のマリファナを使う大きな二つの理由は「気晴らし・娯楽」と「ストレスと不安の軽減」で、日本の使用者のマリファナを使う一番の理由は「気晴らし・娯楽」でした。

42. Why don’t non users use marijuana

そして、マリファナを使った事がない人がマリファナを使っていない理由、と言う質問に対して、66%のマリファナを経験した事がない日本人はマリファナを使っていない理由が「法律で禁止されているから」と答えましたが、60%が「不健康だから」また73%が「興味がない」からと答えました。アメリカ人の殆どは「興味がない」からと答えました。

43. Part 3 Summary of Findings
それでは、研究質問３の結果のまとめです。

66%のマリファナを経験した事がない日本人がマリファナを使っていない理由が「法律で禁止されているから」と答えましたが、「不健康だから」「興味がない」からと答えた回答者も同じ程度又はそれ以上いました。このことから、法律を怖がるだけではなく、マリファナに対しての認識と知識も影響されると言えます。

殆どのマリファナを経験した事がない日本人は「何も言わないが、少しずつ離れていくと思う」や「やめてと頼む」と答えました。さらに、マリファナを経験した事がない人がマリファナを使ったら、日本人はアメリカ人より反対する周囲の人が多かったです。

日本の使用者は社会的に反発の可能性がより高いと考えられます。

44. Overall Conclusion

研究の結論として、まず、一般的に日本ではマリファナに対して危険性と中毒性が高いというイメージがあります。この事は、自然の原料から作られたマリファナと人工的に作られた脱法ハーブの違いが分からないからかもしれません。

マリファナを経験した事がない４割のアメリカ人はマリファナを使っていない理由が法律で禁止されているからと答えました。マリファナを経験した事がない日本人も同じ回答が多かったですが、興味がないや不健康だからという理由も多く認識が違います。

マリファナを経験した事がない日本人は主に学校やメディアからマリファナについて学びましたが、アメリカの回答者と日本の使用者はインターネットや家族からも学んだと答えた事から、身近に入る情報が大きな影響をすると言えるかもしれません。これはマリファナに関する認識は法律だけではなく、マリファナについての知識をどこから学んだかが影響されると言えます。

45. Limitations of study

T: 研究の限界点としては、日本ではマリファナが違法なためか、日本の使用者の回答者を集めることが難しかったです。
また、反発を恐れ、アンケートを取りたくなかったかもしれません。
将来の課題としては脱法ハーブと日本やアメリカの一般認識の関係をより深く研究したいと考えています。